

末世一津話 大阪大地震絵図

江戸幕府は、大地震とともに始まり、日本列島を揺るがすほどの大地震とともに終わった。家康が江戸城の大改築にとりかかった翌年、1605年には慶長の大地震があった。

1854年12月23日(嘉永7年、旧暦11月4日)、マグニチュード8.4の巨大地震が東海地域に起こり、続いて約32時間後、同じく8.4の巨大地震が南海地域に起こった。その年、元号は安政と改められた。前者は安政東海地震、後者は安政南海地震と呼ばれている。

翌年、1855年(安政2年)、江戸の八百八町は、直下の大地震に見舞われた。

有村治左衛門兼清が、薩摩から出てきて江戸屋敷詰めになったのは、それからわずかに4年後の秋であった。そして次の年、旧暦3月3日、雪の降る桜田門外で、大老井伊直弼は治左衛門たちに討たれ、明治維新にいたる幕末の激動の舞台の幕が切って落とされたのである。

幕末の大阪の町も、江戸の町と同じように大地震に揺すぶられていた。安政の巨大地震の直前、同じ年の旧暦6月15日、伊賀上野から奈良にかけての地域を震源とする地震があり、死者多数の被害があった。大阪でも激しく揺れ、余震が何日も続いて人々に不安を与えていた。

駿河湾から紀伊半島、四国の沖を通る南海トラフで、フィリピン海の海底が日本列島の下に沈み込んでいる。そこでは100年に一回ぐらいの割合で巨大地震が起こる。その前後には関東から西の内陸部で地震活動が盛んになる。伊賀上野の地震も、やがてプレート境界に巨大地震が起こる前触れであった。

安政東海地震による津波は、房総半島から土佐の海岸に被害をだした。下田の港にとまっていたロシアの軍艦も、この津波で大破し、やがて沈没した。津波は太平洋を渡ってサンフランシスコに達した。

翌日の安政南海地震では、紀伊半島から四国、九州の沿岸に大津波が押し寄せた。大阪では、津波が木津川などをさかのぼった。

岡田武松氏が戦前の海洋気象台の台長だったとき、地震や気象災害の歴史資料を熱心に収集していた。そのコレクションの中に、当時2円で購入された一枚の和紙に木版で刷られた扇面がある。

現在の神戸海洋気象台に保存されている扇面の上段には、地震による被害がこまかく書き記されている。

旧暦11月4日の地震は、「……今年夏大地震これも夢のように思いしに、去る十一月四日朝、夢うつつ共なく恐ろしき大地震」と、激しく揺れ、被害もでたが、震源地は少し遠い様子である。翌5日の地震は、「五日夕方より夜にかけ大地震、果ては津波となりにし事の……」とあり、大地震に続いて津波があり、大きな余震が続いたことがわかる。

扇面の下段には、大津波のありさまが描かれている。5日の夕方の津波は、「南西の沖雷の鳴るごとく、……大津波一丈四五尺もある波打来たり」千石前後の大きな船が重なり合い、小舟を下敷きにし、道頓堀川のいくつもの橋を押し落とし、川端の家々を引っかけていった。

このような東海・南海地域の巨大地震は、フィリピン海プレートの動きが続いているかぎり、確実に繰り返す。1944年(昭和19年)の東南海地震と1946年の南海地震の間に、太平洋戦争は終わり、大阪の町は戦災から急速に立ち直って現在の繁栄を迎えた。

あと数十年で、また巨大地震が南海トラフに必ず起こる。震災を「末広がり」に描いた作者の名もその意図もわからないが、この歴史を忘れることなく、次の地震に備えていかなければならないことは確かである。

尾池和夫／京都大学理学部教授



末世一津話 神戸海洋气象台蔵

